

遊びにおける新たな視点

—「危険除去思考」と「遊び擁護思考」の共生—

堀江 菜子（大阪教育大学）

1. 背景と目的

子どもの遊び場における安全確保の在り方をめぐっては、次の2つの考え方が往時から確認できる。すなわち、(1)事故防止のために危険を全面的に除去すべきとする考え方と、(2)危険の除去を必要最小限に留めるべきとの考え方が昔から存在し、時には対立と議論を生んできた（本研究では前者を「危険除去思考」、後者を「遊び擁護思考」と呼ぶ）。

先行研究ではどちらか一方の考えの正当性を主張しているものが数多く見られるが、双方の考えを俯瞰的に見て整理し、新たな考え方を生み出そうとする研究は少ない。

そこで本研究では両者の考えを統合的に発展させることで、子どもの遊び場における安全についての新たな考え方の提案を研究目的とする。

これにより両者の考え方の狭間で思案する子どもの支援者や、教育者に新たな知見の提供がもたらされるばかりではない。すなわち、子どもの支援や指導における向後の議論活性化が果たされるだろう。

2. 第1章 遊びにおける2つの考え方の整理

本章では危険除去思考と遊び擁護思考の背景にあるもの、さらに両者のメリット・デメリットについて、統計や参考文献をもとに整理した。

まず危険除去思考では、少子化により子どもの危険に目が留まりやすくなったこと、責任追及の風潮が強くなったことが主な背景として明らかになった。この立場のメリットとしては、不慮の事故による死亡数の減少、反対にデメリットとしては、子どもたちにおける危険回避能力の低下が挙げられた。

次に遊び擁護思考については、危険除去思考に対抗する形で生まれたと考えられる。この立場を採ることのメリットとしては、子どもにおける危険回避能力と自己効力感の向上、逆にデメリットとしては怪我に対する保護者の理解の得難さが挙げられた。

3. 第2章 遊びにおける2つの考え方の共生に向けて

本章では、危険除去思考と遊び擁護思考の両者の考えの統合・共生と新たな考え方の提案に向けて、事故事例とプレーパーク（Play Park：遊びの場）の考察視座をもとに本研究の議論を発展させた。

一方の事故事例においては、リスクとハザードの観点から事故の原因と対策を検討した。その結果、保護者をはじめ大人による監督のもと、許容範囲内での危険を敢えて意図的に提供することが望まれる。このことにより、子どもは却って事故への危機意識を弁えるとともに強化し、結果として遊びの価値を守ることが出来るようになった。

またプレーパークの観点においては、自己決定と非手段性（＝遊ぶこと自体が目的）を遊びの主な魅力とし、その遊びの価値を保育園や学校等に反映させるための改善策を検討した。その結果、事故が起きる前の対応確認や、保護者に向けて遊びの価値や怪我防止の取り組みを説明することの重要性が明らかになった。

4. 結論

支援者や教育者が遊び場に潜む危険性と遊びの価値を熟考した上で危険の除去と受容を区別し、受容する場合は遊戯場所の体勢を整えた上で子どもたちの能動的な挑戦を見守るという意識が2つの考えの共生による新たな考え方である。さらに、双方の考え方を正反対と捉えず、子どもの成長という共通目的に向かって違う視点から目的達成を目指すもの同士と捉えることで、両者の歩み寄りが実現すると考えられる。

<参考文献>

掛札逸美（2012）乳幼児の事故予防：保育者のためのリスク・マネジメント。ぎょうせい。